

3－2					
主 題	地域開放型スペースにおける認知症カフェの効果について				
副 題	常時開催型認知症カフェから見てくるこれからの福祉の在り方				
キーワード 1	認知症ケア	キーワード 2	地域貢献	研究(実践)期間	1 1 ヶ月

法人名・事業所名	社福) 白秋会 特別養護老人ホーム泰山
発表者(職種)	中川文乃(事務職員)
共同研究(実践)者	野澤彩子(介護職員)

電 話	03-5622-1165	FAX	03-5622-1673
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	平成14年に江戸川区に開設した特別養護老人ホーム泰山は「地域に広く開かれた誰もが利用できる福祉施設」を目指した地域に密着した施設です。「より皆様の近くに」「地域の中で」「できる限りの事を」職員一同、地域の一員としての自覚を持ち、皆様が楽しみのある毎日である様取り組んでいます。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

これまで、特養のご利用者や地域の皆様に活用戴いていた、施設近隣に設置している、地域開放型スペースを平成28年10月より認知症カフェ「カフェ泰山らんど」としてリニューアル。地域包括ケアシステムにおいて、認知症ケアの一環として推奨されている認知症カフェは随時開催される形式が多いが、認知症の発生状況は安定していないことから、個々の状況に合わせていつでも出かけられ、地域の方々と近い距離で触れ合う場所が必要と考え平日開催型として始動。地域の中ではまだ「認知症カフェ」は周知されておらず、認知症がある方への案内や、地域の皆様の理解、協力を得る事ができるのか、日常的に継続したアプローチが認知症にどれだけ効果が持たされるのか、課題は山積みである。認知症が強い施設ご利用者も、地域の中で認知症をお持ちの方も、地域の一員として、地域の中で交流して行く場としての実現を目指す。また、認知症予備軍とされている方へのアプローチ、一般の方の介護予防についても取り組む必要がある。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

地域の方、施設のご利用者、認知症等をお持ちの方が、日常の環境の中で、相互の性格を自然に理解し、円滑な交流を行うことができ、更に、認知症予防、認知症改善、等が行える場所を構築する。1、カフェの名の下、心のこもった、美味しいコーヒーやお茶、ケーキやお弁当等の提供により日常生活の環境を整備する。2、看護、相談員、等専門性の高い職員が常駐し日常会話から自然に助言、支援する。3、地域の方が行う趣味活動により介護予防や交流の場となる。4、これら活動により、それぞれの方々にどれだけの効果が生まれたか、少人数でも日常的に開催している認知症カフェの効果が高いことを検証し今後の認知症ケアの実践にも役立てる。5、「認知症カフェ」の名称は認知症限定、特定してしまう等がある事を踏まえ「カフェ泰山らんど」とする。

《3. 具体的な取り組みの内容》

①対象者；特養等介護サービス利用者、地域の方、認知症の方、そのご家族等②手法；本当のカフェのようにコーヒーやランチのカフェメニュー設置、ボランティアなどによる趣味活動各種教室の開催、認知症相談常時受付③時間と期間；検証期間は平成 28 年 10 月より 11 か月時間は平日 10 時より 16 時の 6 時間④手順；月単位で予定表作成、主な予定がない場合通常カフェとし、訪問者については、内容等記録する⑤職員構成；地域支援事業に関わっている介護職員、事務職員地域包括支援センター職員⑥連携；地域包括支援センター⑦費用等；家賃、コーヒー等購入費（カフェご利用者は 100 円で購入）⑧成果のポイント；地域の方、ちょっとだけボランティアの実施、口コミ⑨施設のバックアップ；平成 28 年度より地域支援事業の取り組みとして事業計画として必要経費も計上し法人全体で積極的に取り組んでいる。

《4. 取り組みの結果》

平成 28 年 10 月開始当初一日当たり 2、3 名、「認知症カフェ」について圏域を広く民生児童委員などから案内を開始、周知に取り組む、12 月年末にかけて各地域自治体を中心に積極的に利用、次第に口コミで、来る方が増加、認知症に効果的と言われているカレー教室を地域在住外国人のボランティアが開始。その他多くのボランティア講師による各種教室数増加、地域の認知症をお持ちの方の交流も認知症改善もできている。平成 29 年現在一日当たり平均 5 名程度、各種教室開催日は 10 名程度、事例としては、ADL の低下と認知症予備軍とされている男性は、地域在住外国人講師による英会話に参加、若い頃出版の仕事の関係上英語と関わっていたと、簡単な単語を話しながら、回を追う毎に日常会話も英語もスムーズに穏やかになられている。コーヒーを飲みご自分の時間を持つことが良い効果を生んでいる。確実に地域に周知されてきており、利用している方は改善が認められ、特養の方も地域の方も認知症の方も同じ環境で自然な交流が実現できている。

《5. 考察、まとめ》

認知症カフェの日常的な開催は地域に根差し、認知症、認知症予備軍の方へ確実に効果が見られた。地域の中で福祉施設が、福祉施設職員がどのような役割を担っているのか、社会的課題の一つでもある。福祉施設が有する機能をより身近に活用頂くきっかけとなった本取り組みは、更に進化していく必要性が有ると考えている。今回の実践における最大のポイントは地域の方々のクチコミの力であった。地域の中で活動できる人材はとても多く、地域を支える地域力は、想定以上に発揮されていた。「認知症カフェ」という小さな活動が、福祉施設の在り方も、地域へのスタンス構築も地域包括ケアシステムの実現につながっていると実感できる取り組みである。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

月刊 地域ケアリング 北隆館 2017 vol 19

《8. 提案と発信》

ある、自治会の会長が「うちの町会には福祉施設がないから施設との交流は大歓迎です。」とってくださいました。地域の中での福祉施設の在り方が問われている今、地域の中で歓迎される施設として、常に出来る事を着実に取り組み、広げていきたいと考えています。